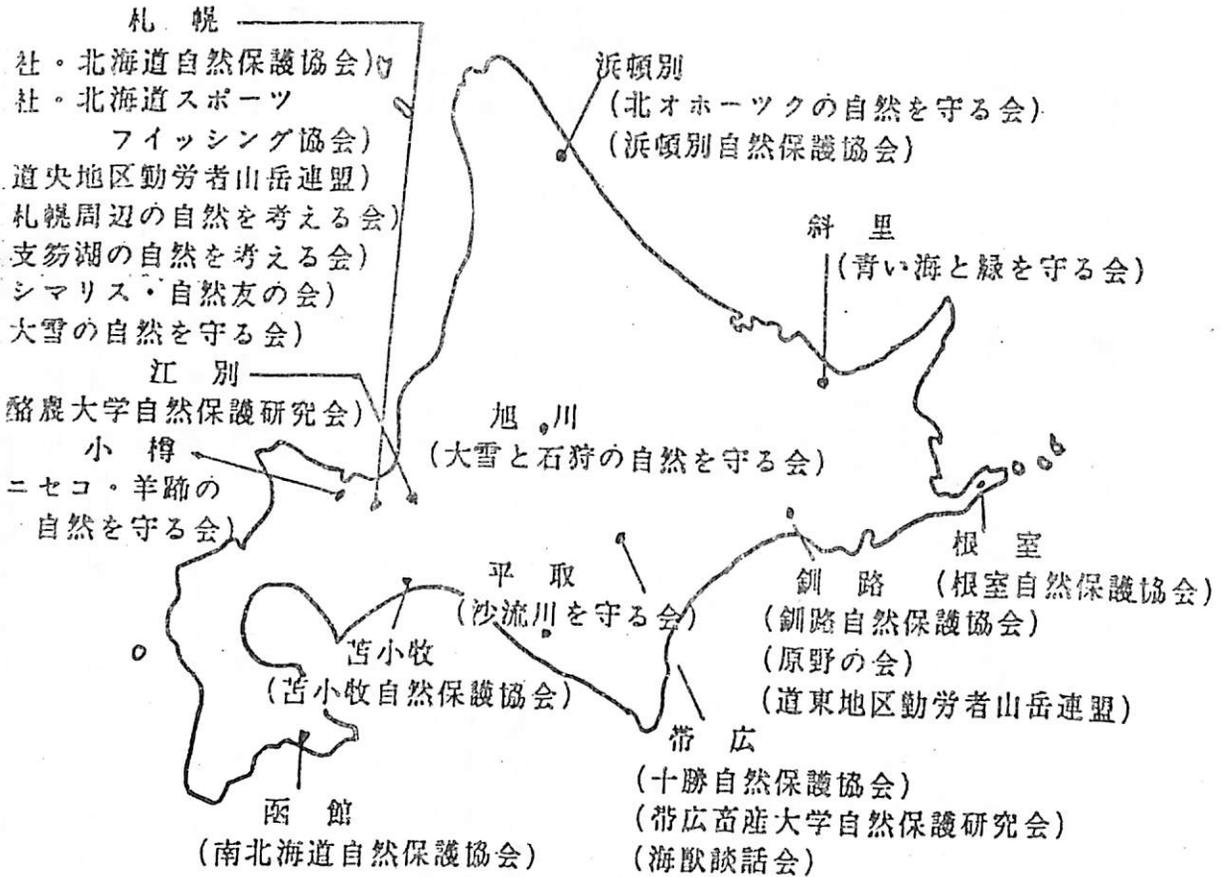


北の自然

第25号

1985年7月25日



日本海へ流れる川の一部を幅四〇〇メートルもの水路で太平洋に流す。この二つの海を結ぼうとする巨大な構想が「千歳川放水路計画」である。

この計画は、一九八一年八月におきた開拓始まって以来の規模と言われた石狩川水系の洪水の後に、治水対策の目玉として打ちだされた。

(一) 以前からあつた水路計画

この水路構想は突如として現われたのではなく、明治の頃からあつた。その最初のもものは、今から八〇年も前の明治三五年で、石狩川の治水対策として検討されている。この計画は流れたが、次に昭和一〇年代には運河として再浮上した。この運河構想は、具体的に計画・調査が行なわれ、昭和一六年には掘削工事に着手している。しかし、この工事も敗戦とともに中止された。

戦後も、運河としての計画は何度か頭をもたげたが、いずれも実現しなかつた。しかし、昭和四〇年ごろからは、運河ではなく治水対策の一つとして検討されるようになった。放水路には、「この様な歴史があり、開発側も」先輩たちの夢が実現できる」と力をいれている。

(二) 治水対策としての放水路

一九八一年の水害の後、建設省は今までの治水計画を改

め、「石狩川水系工事実施基本計画」を作成した。これまでの、一〇〇年に一度の洪水に対処する計画を、一五〇年に一度に改めたものである。千歳川放水路は、この「基本計画」の中で、遊水池、ダムなどと共にだされている。

この「基本計画」の一部として、洪水時の新石狩大橋におけるピーク流量を、毎秒一万八〇〇トンとし、これを途中で大雪、忠別などのダム群と、遊水路で毎秒四〇〇〇トンをカット一万四〇〇〇トンとする計画が上げられている。

(三) 放水路計画とは

この千歳川放水路は、石狩川と千歳川との合流点に水門をつくり、洪水時にこれを閉じて、千歳川水のみを毎秒一二〇〇トン太平洋に流すという計画である。平常時は、千歳川と放水路の間の水門は閉じられ、千歳川の水は石狩川へ流れるようになっていく。

ルートは、現在三つの案がある。どのルートもまず、千歳市の下流の大学排水から、千歳市の駒里地区の丘陵を切りひらき、苫小牧市との境界付近で、東、西、中のそれぞれルートにわかれる。

西ルートは、美々川流域ぞいに川幅をひろげ、ウトナイ湖を通り、勇払川から安平川に抜ける。

東ルートは、遠浅川から安平川に入るもので、早来町の農業地域を通る。

中ルートは、遠浅川から苫小牧東部工業基地をかすめて安平川に抜ける。

放水路の長さは三五キロから三八キロ、川幅は上流で三〇メートル、中流で四〇メートル、下流では四五〇メートルである。四〇〇メートルの川幅では、普通のドライブマップ(二〇万分の一)上では、二ミリの帯となつて現われます。

河床は、上流では海面下一メートルまで掘り下げ、特に千歳市駒里の丘陵地帯では約三〇メートルも掘り下げる。下流では海面下三メートルまで掘り下げ、河床の勾配は、約一万九二五〇分の一となる。平常時には、非常にゆつたりと流れる川になる。

この工事のために掘り出される土砂は、一億立方メートルとも言われ、高さ一メートルとして積らすと、一〇キロ平方メートルもの面積になる量である。

開発主体は開発局で工期は二〇年から三〇年と言われ、工費は二〇〇億円にのぼる。

(四) 今までの経過

一九八一年八月

石狩川中流域で水害。

一九八二年三月

建設省「石狩川水系工事実施基本計画」を作成。

一九八二～一九八四年

放水路計画に関する調査(非公)

開)
新聞に報道される

一九八四年六月 開発局より公式発表される。

一九八四年七月二〇日 苫小牧、千歳、早来、長沼の

一九八四年八月八日 関係市町と開発局が公式協議

一九八四年九月九日 開発局は、八五年度予算要求

で放水路に約二億五〇〇〇万円を計上、八六年度着工をうちだす。

一九八四年九月一〇日 野鳥の会を中心とする自然保護

一九八四年九月一〇日 植苗、遠浅、駒里などの住民

一九八四年一〇月一五日 環境庁長官「西ルートは好し

くない」と発言。横路知事、放水路賛成を表明。

一九八四年一〇月一七日 開発庁長官「西ルートを断念」

一九八四年十二月二〇日 東ルートを中心に調査を進めると発表

一九八五年 アセスメント調査実施

一九八六年 着工予定

今までの経過を見ると、八四年七月公式発表、八五年アセス、八六年着工と、過去に例をみない早さで事が進んで

いる。いちおう、関係市町、団体への説明はあったが、十分とは言えず、強引とも思える開発局のやり方には、必ず造るという意気込みが感じられる。

(五) 千歳川放水路計画の問題点

A 自然への影響は

放水路による自然への影響では、真つ先にウトナイ湖が上げられる。ウトナイ湖は、日本で初のバード・サンクチュアリ(野鳥の聖域)に指定され、天然記念物であるガン・ハクチョウなど渡り鳥の重要な中継地でもある。そのため、日本野鳥の会、苫小牧自然保護協会などの地元自然保護団体は、「西ルート反対、美々川源流部通過反対」を主張し運動を進めている。年々浅くなつてきているウトナイ湖にとって、主たる流入河川である美々川の水量や水質の低下は死活問題である。

これらの不安に対して開発局は、どのルートを通つてもウトナイ湖には少なからず影響があると述べており、野鳥の聖域であろうと計画上どうしても影響が出る場合はしかたなしとしている。

この様な大規模な自然改造によつてどのような影響が現われるのかは、まったく不明であり、ウトナイ湖だけでなく、この流域全体の自然がどう変化するか、何人も予測は出来ないのではないだろうか。千歳川放水路は、予想不能なほど、大きな計画なのである。

B 地域社会への影響は

放水路のルート上には多くの人々が生活している。ルートの主な産業は農業である。放水路は、これらの農業地域に多大な影響を及ぼすと思われる。

放水路によつて、農地が大幅に削り取られれば、農業をやめなければならない所も出る。美沢・植苗地区の酪農地帯など、優良な農業地域が多い。一坪でも減らしたくないと思つている農家の人も多い。

放水路の水による気温の低下も心配されている。早来町の遠浅地区は水稲地域だが、この地域は海からの霧などの影響で霜が作れるギリギリの温度である。わずか、一度、二度の違いで収量が変わるため、放水路に対して不安の声が上がっている。さらに、放水路が霧の通路になつて、内陸へ上がってくるのではないかと、地下水の水脈に変化が起き、地下水が出なくなるのではないかなど問題もある。

漁業関係者からも不安の声は上がっている。放水路の河口にあたる太平洋側では、濁水などによつて沿岸環境が変化するのはないか、日本海側では、サケ・マスの上昇に影響があるのではないかなど問題が上げられている。さらに、開発局は漁業に対しての説明が不足しているという不満もでている。

これらの問題に対して開発局は、同等価値の補償に理解を求めようとしている。

C 治水事業の失敗から

石狩平野を流れる石狩川は、深川市付近から勾配が緩やかになり、流れも遅くなる。このため川は平野を蛇行し、ひと雨降るごとに洪水の起る川であった。

元来の治水工事は、流れをよくするためのショートカットと、堤防をつくり、水を押し込める方法で行なわれた。

そのため、上流の水が比較的是やく中流に集中するようになり、中流域の洪水が起るようになった。また、本流の水位が上がったため、支流の水が本流に流れこまず、さらに支流へと逆流する現象が起き、支流の氾濫を招いた。

一九八一年の水害は、このようにして起つたのである。さらに、遊水池をつぶして、農地にした事も要因の一つである。遊水池は、洪水のたびに冠水し、水をためて、川の水位を下げる役割をになっていた。千歳川を例に上げると、中流にあつた長都沼が遊水池の役割をしていたが、ここを干拓したため、さらに危険な川になったと言われている。

一九八一年の水害は、起るべくして起り、人為災害ではないかと、唱える人もいる。千歳川放水路は、これらの治水対策の失敗を粉飾するものではないだろうか。

D 石狩川本流の治水対策は

千歳川放水路は当初、石狩川の水を太平洋に流すという石狩川の治水対策であると思われていた。しかし、開発局から提示された計画では、洪水時には石狩川と千歳川との合流点に設けた水門を閉じ、千歳川の水だけを流すことに

なっている。つまり、放水路は石狩川本流ではなく千歳川の治水対策が目的である。さらに、今までのように、千歳川に本流の水が逆流しないため、本流がこれまで以上に危なくなる可能性も出てきたのである。こうなると、何のためか治水かわからない。

E 開発局の仕事がしか？

この千歳川放水路計画が出現した表向きの要因は、一九八一年の水害だが、その裏には開発局の仕事がしではないかとの意見もある。現在、行政改革の中で、開発局は国土庁との統廃合の問題が上がっている。そこで、開発局はこの工期二〇年以上、工費二〇〇億円という巨大プロジェクトを存続の理由にしようとしているのではないか。また、当時の稲村開発庁長官は、この巨大プロジェクトを知り、在任中の目玉にして、後世に名を残したいようであった。強引とも言える事の進行は、これらのことも要因と思われる。

(六) 放水路は本当に必要か

これまで、計画の概要、経過、問題点をのべてきた。この計画があまりにも大きく、さらに、過去に例をみない早さで進められていることに、あらためて、驚かされる。この計画に対する論議も、ルートについては、さまざまな意見が出されているが、計画そのものが必要なかどうかという基本的なことについては、話題にされていないよ

かという基本的なことについては、話題にされていないように思える。まして、放水路以外に洪水対策は考えられないのかという代案についてもしかりである。

これらの点について、もう少し考えてみたい。

(七) 放水路に代わるもの

北海道自然保護団体連合が主催した、五月一四日の集會では、次のような代案がだされた。

A 遊水池をもうける。

洪水時における遊水池の役割は前にも述べたが、この遊水池を人工的につくるというもの。

専用の遊水池

平常時には全然用いず、洪水時に多量の水を貯める。

臨時的な遊水池

平常時には、人家、公共建物などを設け、生活の場とするが、洪水時には遊水池として水を貯める。これらの人家は高床とし、公共建物などは下部を駐車場などとして利用する。ここに住む人には、建てかえのための補助金を支給、固定資産税の軽減、洪水時の補償などきめ細かな対策を講ずる。

B 石狩川河口部の直線化と流水断面積の拡大

石狩川は、河口付近で直角に曲り、これ以後海岸に平行に三、五キロ流れ日本海に注ぐ。そこで、直角に曲る部分に、長さ四〇〇メートル、幅三〇〇メートルの放水路をつくり、直線的に海へ流す。

しかし、開発局の推定では、石狩大橋において、八センチしか水位が低下しない。しかし、これは、上流の流水断面積が、つぐられ時のままであると考えたため、工学院大学 安倍 教授は、河口部の流水断面が拡大されれば、それにともない上流の断面積も序々に拡大されるだろうという予測をもとに、三メートルの水位低下が期待できると述べている。

C 中水敷を広げ断面積を拡大

石狩川本流については、中水敷を図のように広げこれによつて流水断面を拡大する。

D 大型排水ポンプによる

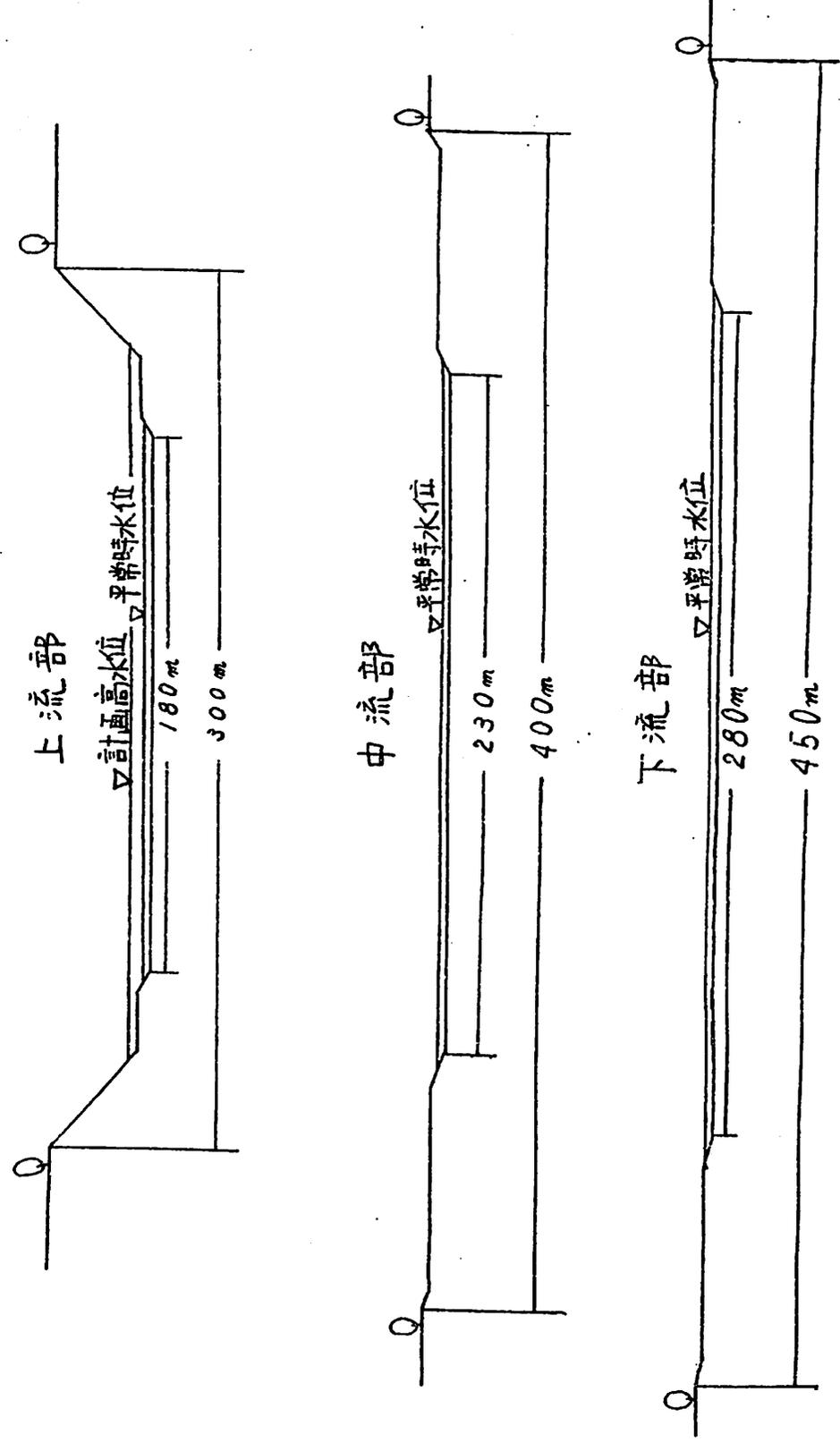
以上の方法をとつたのちになお多量の洪水の場合には、大型ポンプ(毎秒三〇〇トン)を用いて排水する。これについては、前出の 安倍 教授の詳細な提言がある。

(八) 明らかにされない資料

このような大きな計画にもかかわらず、まいどのことだが、公開されている資料は少ない。公開された報告書や計画には、様々な数値があるが、どのようなデータを使つて出されたものが不明となつている。生データをどのように解釈し、どのような方程式にあてはめたかによつて数値は変わってくる。また、極端な言い方をすれば、生データが公開されてなければ、創作でも数値をつくることのできるものである。

これらの基礎データの他に、放水路の影響などの調査報

千歳川放水路横断面図(1/2000)



告がまとめられているが、これらも例にもれず、内部資料として非公開となっている。

(九) 放水路そんなに急いでどこに行く？
 強引ともいえるこの千歳川放水路計画。何故、こんなにまでも着工を急ぐのであろうか。開発局は、住民の要望、治水は絶対に必要である、などの理由を上げている。それにしても、今までの開発にない強引さには、寂然としないものがある。

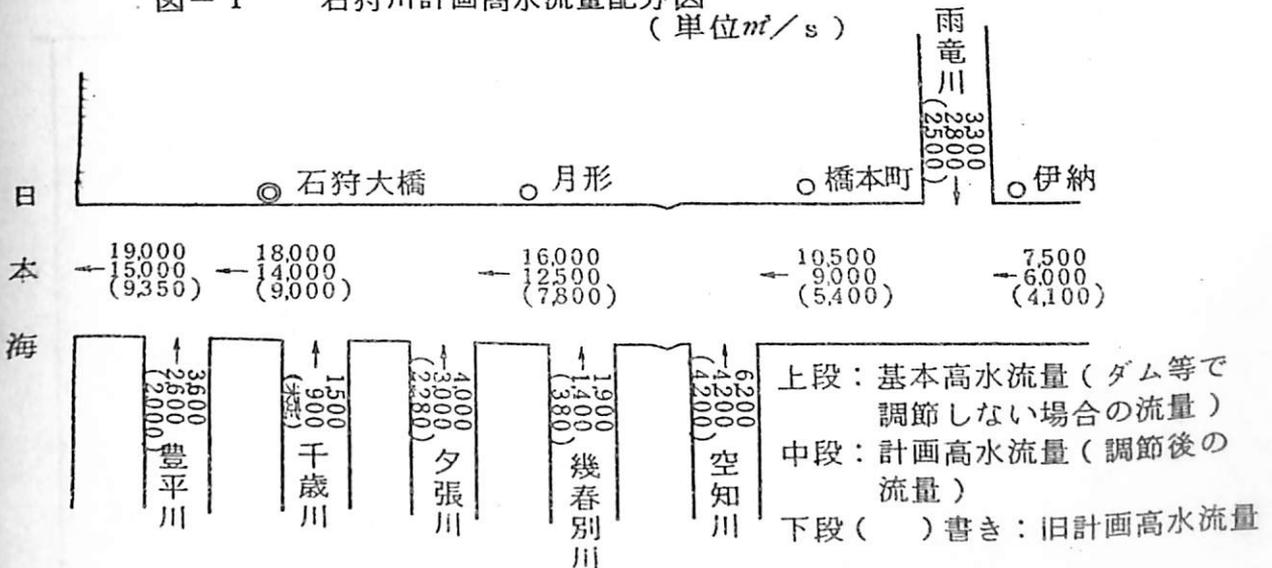
それは、この計画と政治や金の関係が、今まで以上に露骨に現われているからである。開発庁には統廃合の問題があり、この計画は存続をかけた大事業になる。また、元開発庁長官の稲村氏は「在任中の目玉にした」と、開発局の内部からさえも批判が出るほど強引に、事を進めた。その背景には、この計画と前後してこの北海道にゆかりのない稲村氏の後援会が、北海道の土建業界によって発足していることも、見逃せない。彼らにとって、治水だの、自然だの、関係ないのである。

自然破壊だ、農業破壊だ、といろいろな問題の上で上がっている放水路計画だが、ほんとうの問題は、このような、政治や金によって、この計画が動いていることではないだろうか。現在、論議の中心は、ルートをどこにするか、影響をどこまでおさえるかなど、つくられることを前提に行なわれているが、この虚大な計画を白紙にもとし、もう

一度考えなおすことが必要なのではないか。

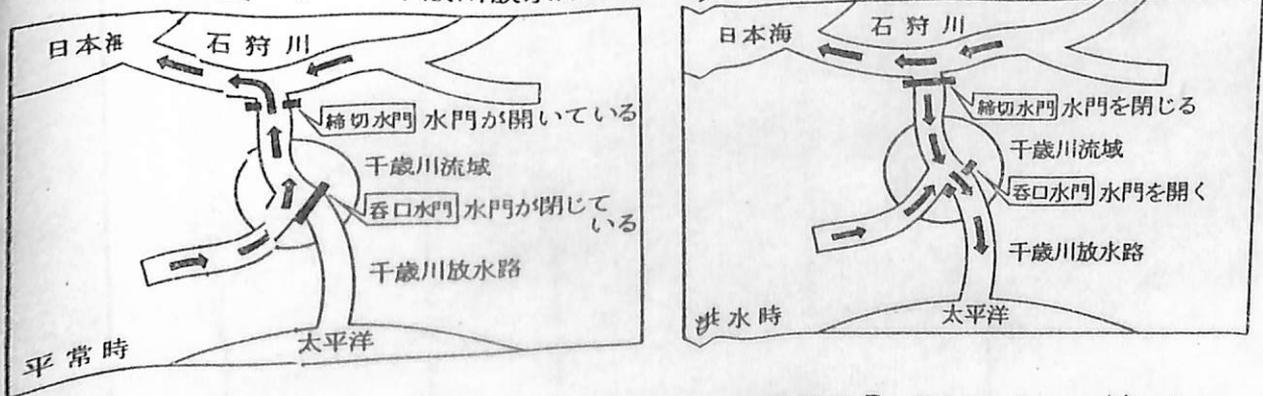
文 責 桜井康雄

図-1 石狩川計画高水流量配分図
(単位 m^3/s)



道開発局『千歳川の治水対策』より

図-3 千歳川放水路のしくみ



道開発局『千歳川の治水対策』より

千歳川放水路計画の代案として

1. 遊水池・遊水地をもうけること

石狩川はもともとの369 kmの流長が264 kmに短縮されたが、この自然にそむいた直線化が今日の水害の原点となっていることに反省しなければならない。また千歳川にあっても長都沼・馬追沼など、いくつかの沼沢地を干拓したことが、この地域の洪水化をまねいた最大の原因である。

専用の遊水池

平常時には全然用いず、洪水時に多量の水を貯める。

臨時的の遊水池

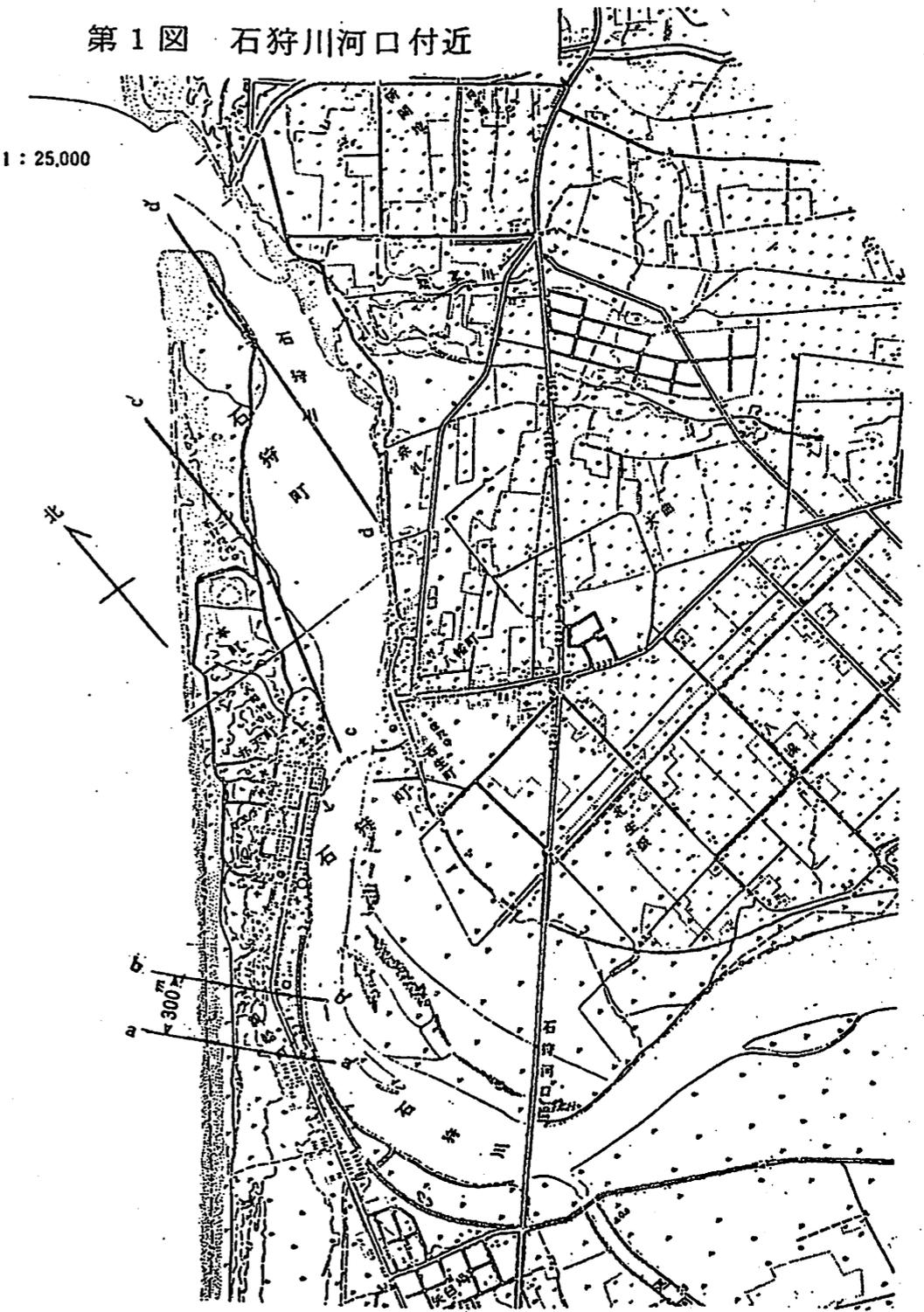
平常時には人家・公共建物などを設け、生活の場とするが、洪水時には遊水池として水を貯める。これらの人家は高床とし、公共建物などは下部を平素は駐車場などとして利用する。ここに住む人には建かえのための補助金を支給、固定資産税の軽減、洪水時の補償などきめ細かな対策を講ずる。

2. 石狩川河口部の直線化と流水断面積の拡大

石狩川は石狩町矢白別付近で直角に曲り、これ以後海岸に平行に3.5 km流れ日本海に注ぐ。そのためこの部分では緩流となり、泥土の堆積がいちじるしい。そこで、石狩町親船町付近に長さ400 m、巾300 mの放水路を掘さくして、河流の直線化をはかる(第1図)。こうして流水断面積を拡大すれば、上流における水位の低下が期待される。

この水位の低下は江別石狩大橋において、開発局の推定によれば、11 cmにすぎないが、工学院大学安信啓教授の計算によれば、最大3 mに及ぶ(第2図)。この著しい差は、開発局では放水路作成によっても、流水断面積は固定されたままであると考えるのに対し、

第1図 石狩川河口付近



千歳川放水路はいらない、道民集会々終わる

五月一四日、札幌市民会館で、「千歳川放水路はいらない！道民集会が、一〇〇人を越える参加者のもとで開かれました。

集会では、放水路計画の概要・経過・地元の人たちの反応などについて、大畑孝二氏(ウトナイ湖サンクチュアリレンジャー)が報告。次いで、放水路によらない洪水対策について、八木健三氏(北海道自然保護協会会長)より説明がありました。

会場からは、「開発局は地元は、放水路ができれば洪水はなくなるという幻想を持たせている。」「放水路は洪水対策にならないことを知らせるべきだ。それには、資料を道民に公開させる運動が必要」と三〇代の男性。「金山ダムの時も洪水対策と言っていたが、目的は、もうれ主義にあった。上流のダムや他の川も見るべきだ。」「と六〇代の男性。「水を治める者は国を制す」というが、今回の計画は極めて政治的。経済効果すら考えられない。」「と提言者の一人。「いろんな素人集団の運動体をつくってはどうか。」「と二〇代の若者。などと

最後に、合唱団々希望々による歌。参加者一同、重心にかえり、勇払の野に、アオサギに、あたたかいおもしろいおのせて合唱しました。さらに、計画廃止を求める要望書、資料公開、討論会開催を要請することを決めて、終了しました。

お詫び

計画廃止を求める要望書につきましては、代案がまだまだ不十分な点が多いことから、提出を見合わせています。



編集後記

○今回は、千歳川放水路特集でした。ご意見・ご感想をお寄せください。

次回は、ゼニガタアザラシの保護とその課題などを掲載の予定です。

会報内容について、ご希望などもお寄せください。

○日高中央横断道路の調査を開始しています。

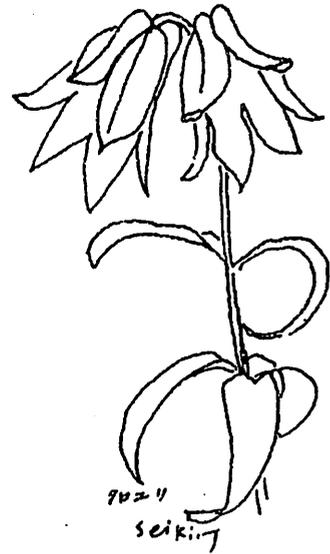
六月に二回。秋にも一度行なう予定です。工事がさほど進んでいないためか、大きな変化はみられません。これから、ねばり強く調査をつみかさねていきたいと思えます。会員の方で、調査に参加されたい方は、ご連絡ください。尚、調査の結果については、二年に一度の割で報告書をつくる予定です。

○前回の会報発送のさい、パッチを同封(昭和五九年度までに入会された会員の皆さんに)しました。パッチは賛助会員の方々にさしあげているものです。もちろん無料です。会員の方から問い合わせがございましたので、改めて、ご連絡いたします。

○次回の会報は、九月発行の予定です。

去年までの会報は、印刷屋さん以外注していました。今年からは、経費節減のため、全て、手づくりです、事務局の方が、ワープロで打ち、印刷し、学生さんや、サラリーマン・ＯＬ・主婦らの手で、折り、ホチキス止めをしています。外注するように、きれいには仕上がりますが、どうぞごかんべんください。

○暑いさかりです。夏ばてにご用心ください。



一九八五年七月二五日

編集発行

北海道自然保護団体連合

代表代行 寺島一男

連絡先

札幌市中央区南一条西八丁目

山鼻レジデンス一〇〇六

電話

(〇一一)五一一九一二六

振替口座

小樽一四〇七一